

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 李 蘇書

道教の歴史のなかで、六朝隋唐の時代は思想・教理・儀式など各方面において大きな変化と発展があった。五斗米道の登場、あるいは上清経や靈宝経の出現と継承など、漢魏六朝期には多様な道教系の文化伝統が現れたが、それらが隋唐期に向かって次第に一つの「道教」へと装いを整えるべく変化融合してゆく。本論文は、このような時期の多様かつ複雑な道教が歩んだ整合化の過程について、主に道・仏・儒の三教間における思想交渉の観点から論じたものである。

本論文は、序論、本論七章、そして総括の終章から成る。まず序論では先行研究の成果を整理しつつ、本論文の目的と構成を明示する。本論は以下の七章より成る。まず第一章は、造像記、歴史文献、道教経典という性格の異なる資料を駆使しつつ、北朝道教が南方道教の教理思想を取り入れて信仰上の融合をはかり、後の整合的な唐代道教の基礎を築いたことを論ずる。第二章は、六朝隋唐期の三教論争を記録する代表的文献である梁の『弘明集』と唐の『広弘明集』に着目し、そこで繰り広げられる仏教側からの道教批判のパターンと時代による変化を明らかにする。第三章は、やはり『弘明集』と『広弘明集』を題材とし、後者にみられる道教教理の扱い方から、道仏両教間の対立が時代とともに深刻化した状況が読み取れると論ずる。第四章は、道教の最高神として「三清」の三尊を設定する考え方について、唐代以前に始まるとする従来の定説を否定し、北宋以降にはじまることを明らかにする。第五章は、仏教の中道思想を援用して説き出された道教の重玄思想について、魏晉に始まるとする従来の説に対し、当時の関係資料の検討から早くとも南朝の梁代までしか遡れないとする。第六章は、唐代を代表する道教経典『太玄真一本際経』などにみられる仏教由来の般若空観思想を考察し、それを導入した結果として道教の修行法も、従来の丹薬服用などの神仙術から、心の解脱により道と合一する新たな方法が構築されたとする。第七章は、道教は儒教が後漢末に確立した五方帝等の祭祀の形態を継承するが、実質的内容は道教自身のものに置き換えるなどで、独立性の確立があったと論ずる。

本論文は、道教が六朝隋唐時代に歩みを進める過程で現れた様々な問題や矛盾について、ある場合は内部の事情により、またある場合は仏教や儒教など外部との関係を原因として変化し整合化を進めた状況について、重要なポイントを押さえて描き出している。

道教の「整合化」の問題として考えるべきテーマは本論文の扱う範囲に止まらず、今後それらの検討も進める必要があるが、六朝隋唐道教の折々の歴史的状況を適切にふまえて、重要な論点に少なからぬ新見解を示して作成された本論文は十分な学術的意義を有するものであり、本委員会は本論文が博士（文学）の学位を与えるに相応しいと判断する。